

①

防災フェス 2023

『阿鼻叫喚からの再起』

関東大震災と越谷

ご 挨 拶

旧東方村中村家住宅にようこそお出で下さいました。この建物は江戸時代の安政大地震（1855 年）や大正時代の関東大震災（1923 年）など、いくつもの地震に耐えてきました。当家の人の中にはこの両方の地震を体験した人もいました。

遠くない将来に、関東から東海、南海にかけて巨大地震が想定されています。今こそ、私たちは先人の経験から様々なことを学びたいと考え、この展示を企画しました。

越谷市教育委員会

『大震大火地域図 東京市全図』

（越谷市立越ヶ谷小学校所蔵）

○ = 消失地域



関東大震災全体の状況（『理科年表』等による）

- ◆発 生：大正 12 年（1923 年）9 月 1 日 午前 11 時 58 分
- ◆規 模：マグニチュード 7.9 ◆震源（余震も含む）：神奈川県西部、相模湾、東京湾、山梨県東部
- ◆震 度：東京 6～7，熊谷 6，長野・浜松 5，福島・名古屋 4
- ◆死傷者：約 105,000 人 ◆全焼家屋：約 212,000 棟 ◆全壊家屋：約 109,000 棟

2

戒厳令・勅令の発布

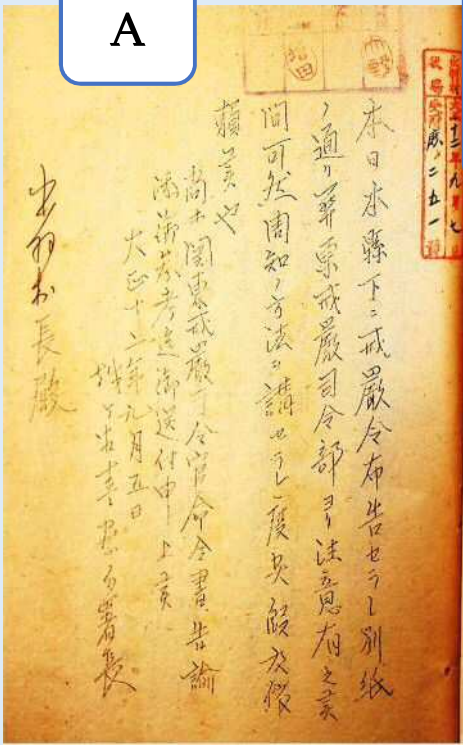
このパネルの史料は『越谷市近現代資料』として所蔵されているものです。

【各町村・人々への発令】

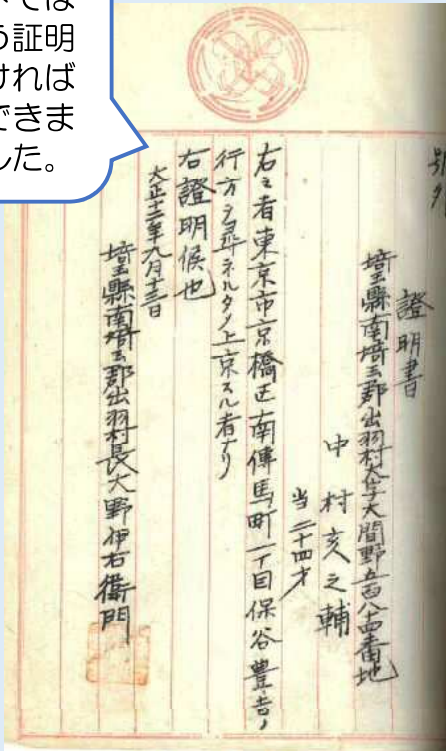
月日	発令者	内 容
9.2	郡、警察	[ア]不逞鮮人の不穏行動を警戒せよ。
9.3	戒厳司令官	[イ]戒厳令発令：不逞団体蜂起の事実を誇大流言禁止する。
9.4	郡、警察	不逞鮮人潜入は[ウ]流言蜚語なので善良者は保護すること。
9.5	戒厳司令官	千葉、埼玉にも戒厳令拡張。
	警察署長	県下に戒厳令布告 →右史料 A
9.5	郡	朝鮮人への誤解をさせぬようにすること。
	郡	県民の自重を望む。朝鮮の人に乱暴しないようにせよ。
9.6	村長	県民の自重を望む。朝鮮の人に乱暴しないようにせよ。（上記の郡からの通達を村民に知らせた文書） →右史料 B
9.7	天皇	[エ]緊急勅令 →右史料 C
9.8	村長	村民に緊急勅令を周知させるように。（各区長に指示）

- 【 註 】
- [ア]：不逞鮮人（ふていせんじん）
悪いことをする朝鮮人という意味で、当時はこのような差別的な表現をしていました。
- [イ]：戒厳令（かいげんれい）
一定期間、立法、行政、司法の権限を軍隊に与える仕組み。戦前の政治では認められていました。
- [ウ]：流言蜚語（りゅうげんひご）
根拠のない間違った情報。デマ。
- [エ]：緊急勅令（きんきゅうちよくれい）
法令に代わるものとして、議会を通さずに発布できる天皇の命令です。天皇大権の一つでした。

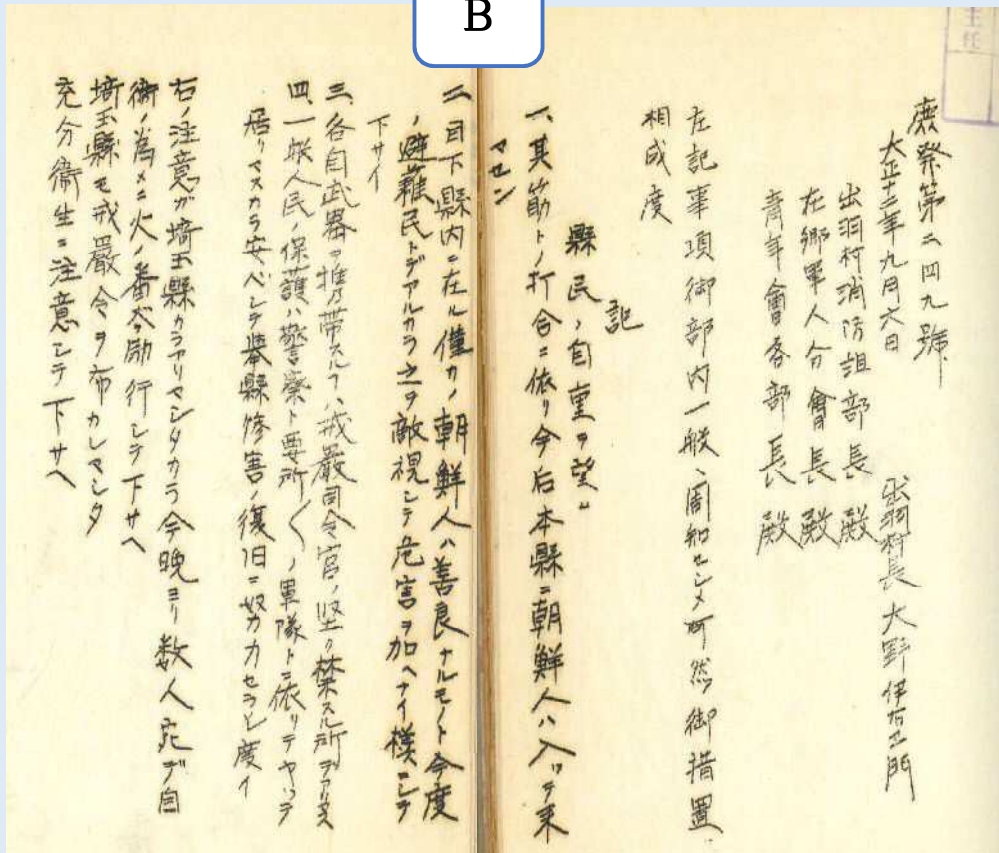
A



戒厳令下では
こういう証明書
がなければ
移動ができません
でした。

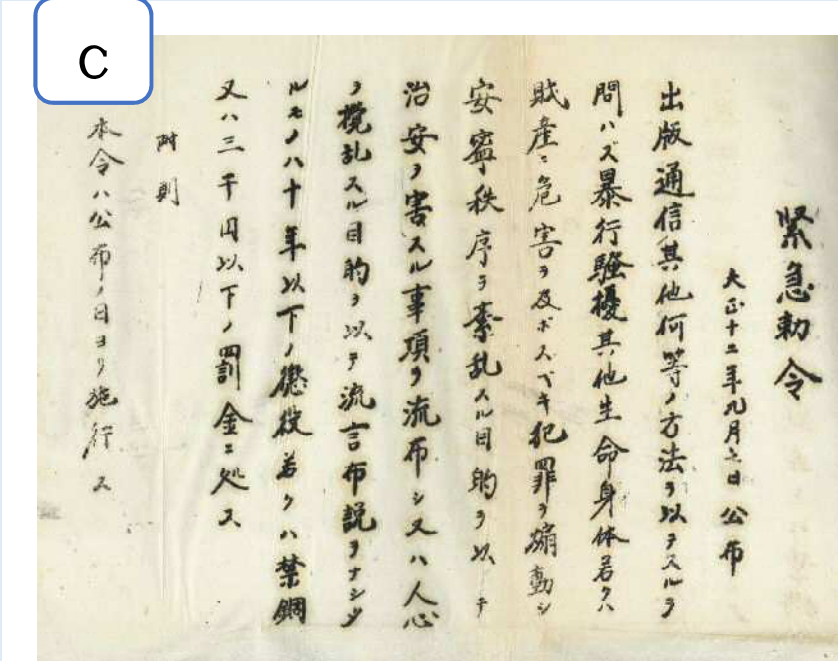


B



9月3日午後5時頃、浦和方面から出羽村に見知らぬ人が通りかかったので地域の人が声をかけたところ、要領を得ない様子だったので、万一のことを考えて警察官に引き渡したら朝鮮の人と判明し、暴行に遭わせないように保護したという記録があります。

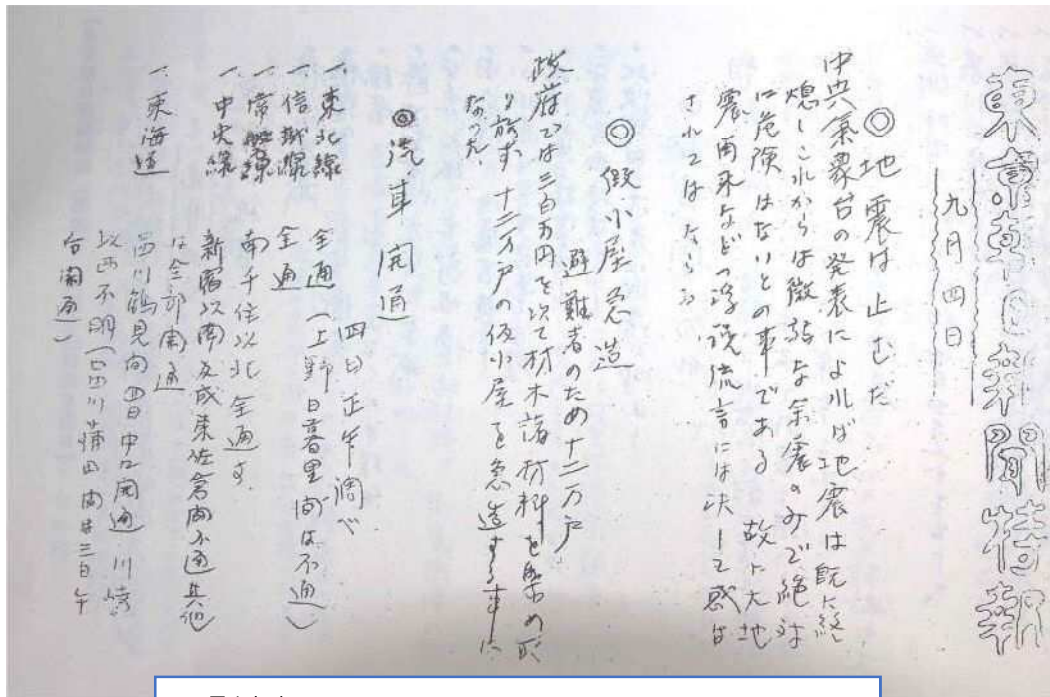
C



大災害による大きな被害と混乱の中で、人々が恐怖や不安になっていたことは、配布資料の村役場吏員の記録からもわかります。

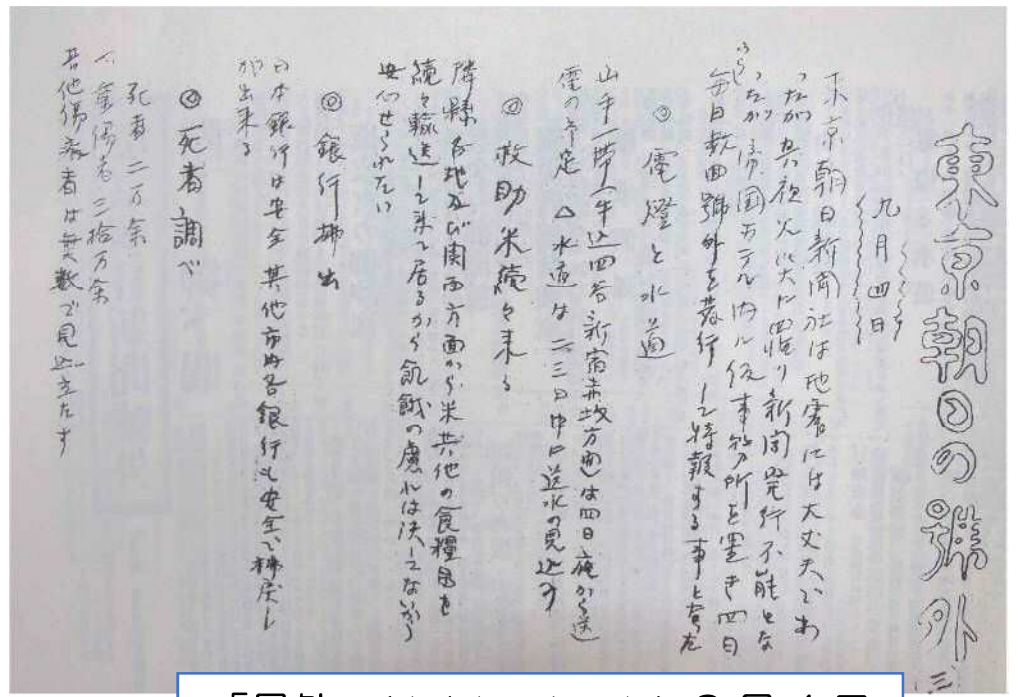
そういうパニックの下で悲慘な出来事も関東各地で起きました。ここに示した史料からは、当初は行政機関も正しい情報がつかめなかったことと、その後は何とか事態を鎮静させて、一時も早く復興に向かっていこうとする様子が見えます。

現代ではSNSなどの優れた機器によって短時間で大量の情報を伝達することができますが、同時にその弱点も日頃から意識する必要があることを、過去の出来事は教えています。



「特報」（東京朝日新聞社）9月4日

（『朝日新聞 復刻版』135 より）



「号外」（東京朝日新聞社）9月4日

（『朝日新聞 復刻版』135 より）

「一刻も早く伝えなければ！」

新聞記者たちは状況を一刻も早く人々に伝えようと、東奔西走していました。東京朝日新聞社の様子を『朝日新聞社史』から抄出してご紹介します。

9月1日（土）

- ◆11:58 発生。通信部長「号外出せるか?！」と叫ぶ。
活字箱が崩れていたのので、大きさがまちまちの活字を集めて号外第1号を300部印刷、新橋方面で配る。
- ◆19:00 本社ビル類焼。社員は皇居前広場に避難。
- ◆大阪朝日新聞社への連絡急務のため、4つの班が向かう。
第1班：東海道線沿いに徒歩で横浜に向かうが引き返す。3日未明に横浜港から出る船で大阪着5日。
第2班：中央線沿いに徒歩で甲府に2日深夜着。鉄道電話で名古屋通信部に連絡。そこから大阪に連絡。
第3班：被災現場写真の束を持って八王子まで車で行ったが相模川鉄橋が落ちていたので泳いで渡る。そこから徒歩で平塚着2日正午。さらに歩いて途中仮眠。御殿場手前で車に乗ることができた。近くの駅から汽車に乗り、大阪着4日（火）8:30。

9月2日（日）

- ◆第4班が北陸線沿いに大阪を目指した。
- ◆帝国ホテルに仮事務所を設置。
- ◆7:30 記者を自転車で浦和通信部に行かせ、そこから車で前橋通信部まで行かせて各地に打電。
- ◆大阪朝日新聞社から各地からの伝聞情報を夕刊に掲載。

9月3日（月）

- ◆前橋に行った記者からの視察記を大阪朝日新聞社朝刊で報じた。

9月4日（火）

- ◆東京朝日新聞社が帝国ホテルで作成した手書きで謄写版印刷の号外（**上の写真**）を発行。
- ◆用紙や輪転印刷機、インクなどの確保に奔走する。8日には片面刷り号外を発行できるようになる。

9月12日（水）

- ◆4ページの朝刊を発行。

この間、大阪からも記者が関東方面を目指していました。

当時の天候

（「関東大震災調査報告（気象篇）」（中央气象台）及び気象庁、国立情報学研究所の資料からまとめたもの。）

台風が9月1日の朝6時には加賀（石川県）西方海上にあり、（中略）長野付近でフェーン現象が発生。その後台風は新潟の東に移動。14時過ぎ宇都宮で寒冷前線通過、降雨。

東京では正午頃南南西12.3mの風。16～18時、前線は東京を通過して風向急変、その後、火災旋風発生。

自らも被災し、様々な困難な事柄を解決しながら大震災の状況を把握して伝えようとする新聞記者の精神と行動には驚くばかりです。

当時は偶然にも加藤友三郎内閣が倒れ、山本権兵衛が組閣するタイミングでもありました。政治の空白が生まれそうな時、新聞記者の活動によるこれらの報道は救援や復興に大きく役立つことになりました。

4

市域の状況

迎攝院の倒壊

(白黒写真は迎攝院所蔵)



震災前の本堂



倒壊した本堂



現在の山門と本堂

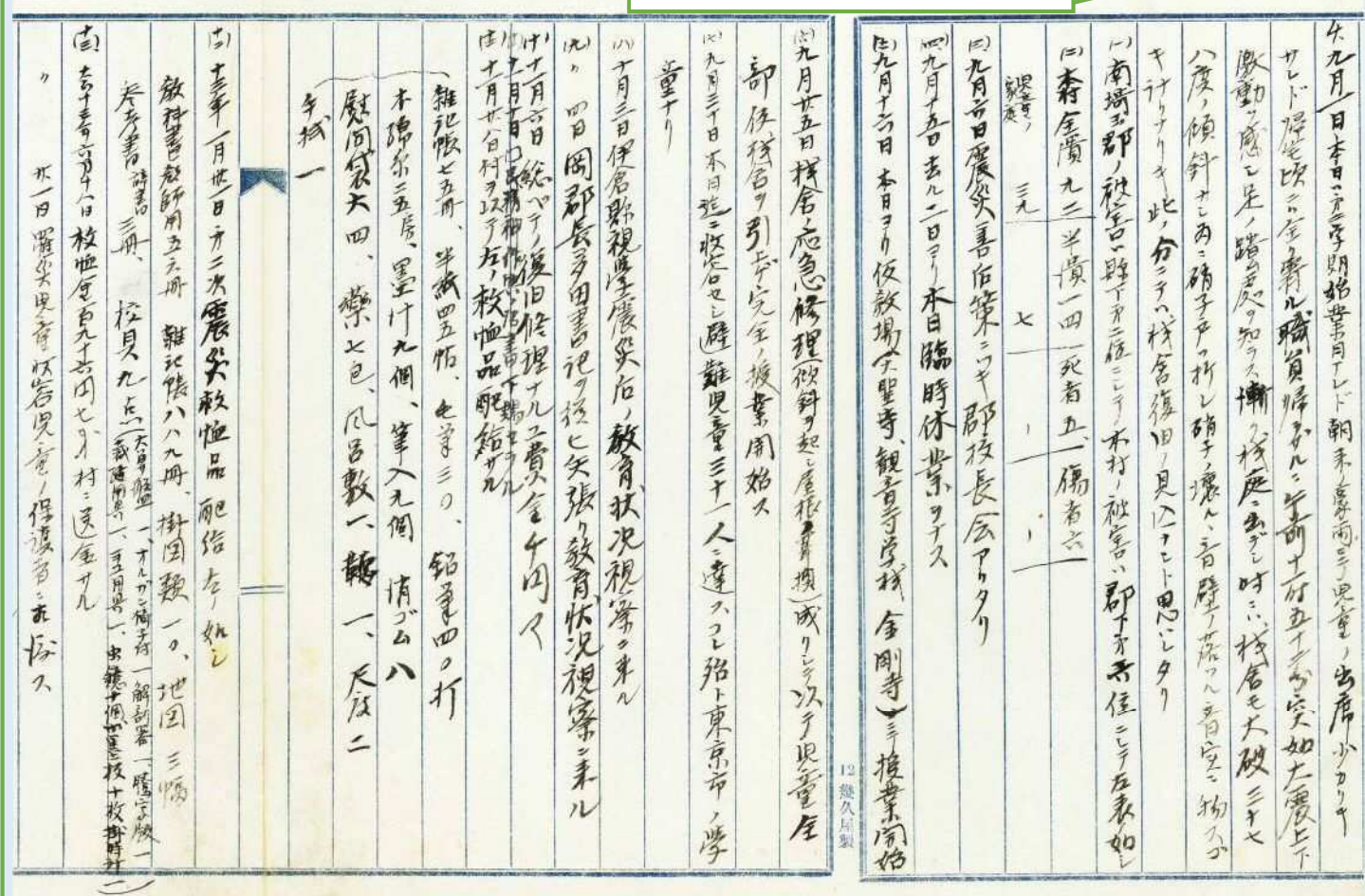
迎攝院は 16 世紀中葉の開山で、古くから四丁野（現・宮本町）の人々の拠り所の一つでした。関東大震災では当院の伽藍の多くが倒壊してしまいました。本堂が再建されたのは昭和 41 年（1966 年）で、実に 40 年以上もの年月が経っていました。このことについて、ご住職は次のように語ってくださいました。

「大震災後は戦争も拡大して、檀家からも多くの人が出征して人口が減りました。戦後も復興に時間がかかり、ようやく高度経済成長の頃に人も増え、経済も上昇して支援してくださる方々も多くなって再建が叶えられました。」

学校沿革誌に記された大震災

市立出羽小学校沿革誌より

市立大相模小学校沿革誌より



学校現場のドキュメント【現代語要約】

(市立大相模小学校沿革誌の記述)

- 9.1 【震災当日】
始業式だが朝からの豪雨で出席少ない。午前 11 時 52 分、突如大地震、上下激動、足の踏む所を知らず。漸く校庭に出たら、校舎が 38 度の傾斜。ガラスや壁が崩れる音が物凄い。
- 9.2 15 日まで臨時休業。
- 9.6 震災善後策のため郡校長会。
- 9.16 本日より仮教場（大聖寺、観音寺、金剛寺）で授業開始。
- 9.25 校舎応急修理（傾斜を起こし屋根葺き替え）により、全児童仮教場から移り、完全に授業開始。
- 9.30 本日までに収容した東京からの避難児童は 31 人。
- 10.3 県視学が震災後の状況視察に来校。
- 10.4 郡長が震災後の状況視察に来校。
- 11.6 修理完了。工費 1000 円也。
- 11.28 救恤（救済）品配給された。雑記帳 75 冊、半紙 45 帖、毛筆 30、鉛筆 40 ダース、慰問袋大 4、その他
- 1.31 第二次救恤品配給。教科書 56、雑記帳 889、掛図 10、地図 3 幅、謄写版、オルガン、解剖器具、裁縫用具、虫眼鏡 10、小黑板 10、その他
- 6.18 救恤金 196 円 7 銭が村に送金された。
- 6.21 救恤金を罹災児童と収容児童の保護者に渡す。

各学校沿革誌からは日常生活をとりもどすまでに何日もかかったことや、東京から避難児童を受け入れたこと、支援物資が届けられたことなどが記されていて、子供たちも心身が傷つきながら復興を目指したことが伝わってきます。

復興に向かって

(1) 越谷市域の被害状況一覧

被害状況は地域によって一様ではありませんでした。このことは当時の尋常小学校沿革誌にも差異が見られることが今回の調査でも確認されました。記述が多く具体的だったのは、やはり被害が大きかった村の小学校でした。

＊負傷者の中には後日亡くなられた方もおられました。

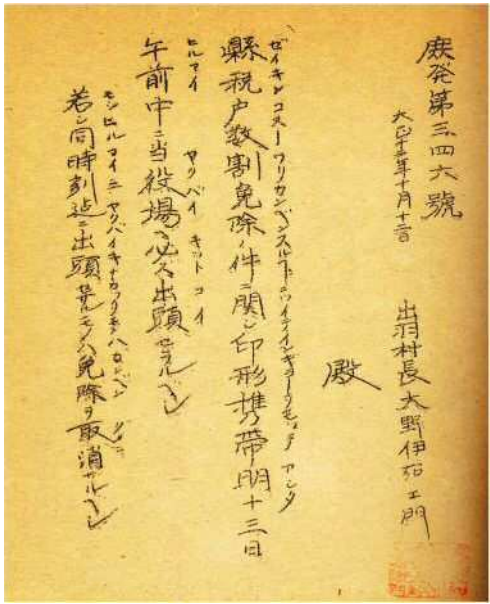
＊倒壊（全壊・半壊）はこの他に蔵や納屋、寺社もありましたが表に含まれていません。

町村	即死	負傷	全壊	半壊
桜井	0	0	68	35
新方	0	0	13	14
増林	0	4	36	37
大袋	1	2	44	22
荻島	0	3	33	15
出羽	7	24	151	41
蒲生	5	4	14	9
大相模	5	25	61	15
川柳	1	4	21	3
越ヶ谷	0	0	18	59
大沢	0	0	20	4
計	19	66	479	254

『越谷市史 五』より

(2) 税減免の要望

『越谷市近現代資料』より



各町村から郡（県）には税金の免除が要請され、郡や税務署からは被害状況や資産状況の照会状が届きました。出羽村では税免除を求める署名と嘆願書が出されましたが、左の史料はその際に希望者は出頭して署名や申請をするように通達した文書です。文言の右側にある小さなカタカナ文は地域の言葉に直して分かりやすくしたもので、以下のように書かれています。被災した人への役場の人の細やかな心遣いが表れています。

戸数割の税金を^{かんべん}勘弁（免除のこと）することについて、印形（いんぎょう＝印鑑）持って、あした昼前、役場にきつと来い。もし昼前に役場に来（き）なかったら勘弁（免除）はダメだ。

(3) 救援物資の要請と分配

（いずれも『越谷市近現代資料』より）

A：県（郡）への要請

『越谷市近現代資料』より現代文に要約

謹啓 ご政務ご多用の節に大変恐縮ですが、次の必需品を至急お願い致します。

※ 3000 枚 一戸当たり 15 枚ずつ
200 戸分

用途 倒壊倉庫の防火、雨漏り防止のため。

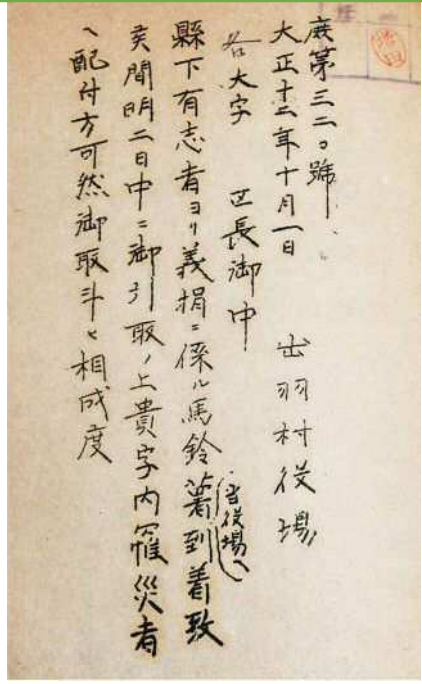
理由 震災で倒壊した農家は急設のバラックを建てて雨露を凌いでいますが、秋の収穫期となって連日の降雨となって困っています。せっかく日に干して乾燥させた稲も、取り込む所が皆無です。仕方なく縄をなっている状態で、刈り取り時期を失しては品質を落として多大な損失をしてしまう状態です。現在、蓆などを用いて防ごうとしていますが、火災になっては取り返しがつかないので、不燃材のものに取り替える必要があります。

10月9日

出羽村長 大野伊右衛門（印）
南埼玉郡長 岡 利和 殿

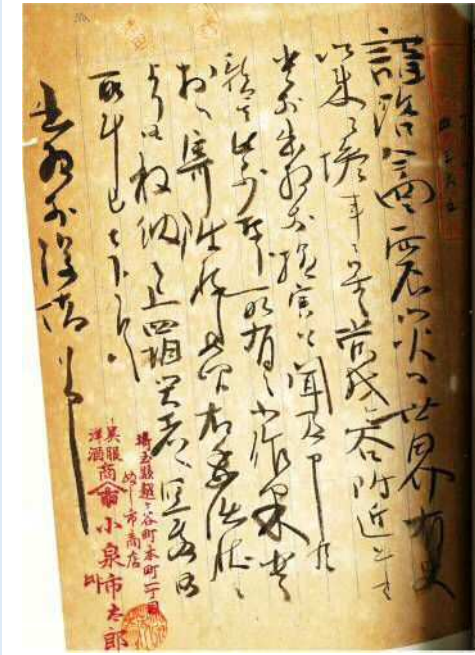
B：馬鈴薯（ジャガイモ）の配給

県内から寄せられた馬鈴薯を各区ごとに配分するので役場にとりこるよう通知しています。



C：小作米の寄付

比較的被害が少なかった越ヶ谷町の人々が、市域で最も被害が大きかった出羽村に小作米寄付を申し出ている文書です。



史料中の「※」は9月に一度要望されて、各戸に5枚ずつ、74戸分が配られましたが、その後天候不安定などもあり、かなり不足したようで、さらに3000枚が必要だと訴えています。文面からはとても窮迫している様子が読み取れますが、これが実現したか否かの史料は見当たりません。「※」は現代ならブルーシートということになるでしょうか。（この答(品物)は当館の中に掲示してあります。）